

(6) 絶滅危惧種ツツザキヤマジノギク保全活動を天竜川に訪ねて

(報告者 中門 吉松)

カワラノギク保全活動を支援して頂いている明治大学倉本教授から「カワラノギクプロジェクト Zoom 講演会」の誘いがあり参加した。テーマは「天竜川の河原に生育するツツザキヤマジノギク」で、中川さやか氏（お茶の水大学グローバルリーダーシップ研究所特別研究員）から研究内容が紹介された。初めて聞いた「ツツザキヤマジノギク」という名は興味深い植物として記憶に残った。ツツザキヤマジノギクはカワラノギクによく似た形態や生態を持ち、天竜川の一部の河原のみに生育している植物であり、天竜川流域の中川村や松川町で保全活動がされていると説明された。中川村では「中川植物観察・保全の会」が、河原ではない陣馬形山山頂での自生地復元管理作業や会員が苗として育てたツツザキヤマジノギクを小中学校子供たちが定植して総合学習として観察・保全をしている。また、環境月間の6月には町民対象に苗の一般配布を行っている。

新たな保全のあり方として興味深かったので、ツツザキヤマジノギクの開花時期に合わせて中川村を訪問して「中川植物観察・保全の会」桂川雅信氏（中川村議会議員）と保全活動についての交流を行った。



中川中学校で撮影

1 ツツザキヤマジノギクとは

別名：イナノギク 花冠は長さ9~24.5mm、多型で同一個体に不分裂~3深裂品がまじる。花筒の長さはヤマジノギクの範囲(2.5~4mm)~花冠の9割長。舌状花冠毛は通常2列で全て赤褐色（外列は内列より淡色）、内列は毛状で(0.6-)1.5~3.0(-3.6)mm、外列は小冠状で(0.2-)0.3~0.7(-0.8)mm、時に内列か外列を欠くが、花冠各部諸元は両列全備品と同じ。筒状花冠毛は通常外列を欠き、赤褐色で長さ(0.7-)2.5~4.0(-4.8)mm。花冠が裂ける。舌状花冠毛は長短2列、分布が限定の3点でヤマジノギクと区別される。花期：8月中旬~11月中旬。分布：南部（伊那谷）。川原土手・草地。本州（長野県）。長野県固有。出典：長野県植物誌（1997年12月発行）第III編 長野県の植物相より

ツツザキヤマジノギクは長野県の絶滅危惧種(IA類)に指定され、絶滅の危険性が高い植物です。県内では中川村と松川町など伊那谷の一部でのみ生育が確認されています。

キク科植物の花は周辺部に平たい形の花びら（舌状花）の並ぶものが多いのですが、この花の花びらは先端付近まで筒状になっているところが特徴です。和名の由来になったツツザキ（筒咲き）のようすは、個体間だけではなく同じ茎からでも舌状と筒状とで異なっているものもあり、花の半周で異なる場合もあります。また、筒咲きのタネから舌状の花が咲く場合もあるなど、今もわからないことが多い謎の花です。出典：中川村HPより

2 ツツザキヤマジノギクの特徴

和名の命名由来になっている先端部分までのツツザキ（筒咲き）もあれば、舌状のものもあり二つが変形したものもあり変化に富んだ不思議な花です。花は個体間だけでなく同一の茎からでも筒状と舌状が混在して咲いたり、半周ごとに異なって咲いている場合もあります。

ヤマジノギクとよく似た種にカワラノギクがあります。ヤマジノギクは長野県以西の山麓や河原に生育し、カワラノギクは長野県以東の河原に生育します。現在、天竜川の河原（実際には陣馬形山山頂にもあります）に生育している。いわゆるツツザキヤマジノギクは冠毛の長さの多様性から、ヤマジノギクやカワラノギク、これらの雑種（イナノギク）の三種の変態が含まれているのだろうと思われる。

出典：国土交通省 天竜川上流河川事務所 2017.9発行パンフレットより

【筒状】ツツザキヤマジノギク特有 【舌状】カワラノギクに類似 【混在】筒状と舌状が混じる



出典：中川さやか氏講演、2022年「イナノギク（ツツザキヤマジノギク）の謎に迫る」チラシより

3 北伊奈郡中川村「ツツザキヤマジノギク」を訪ねて

日時：2023年10月21日（土）10:00～18:00

参加者：桂川・相模川流域協議会1名（市民会員）

訪問先：長野県北伊那郡中川村ツツザキヤマジノギク保全地

対応者：「中川植物観察・保全の会」桂川雅信氏（中川村議会議員）

※7月中旬から情報交換を行い開花時に訪問した。

視察場所：陣馬形山山頂の自生地復元管理地、中川東小学校・

中川中学校・中川西小学校の保全地など。



陣馬形山から望む伊那谷

4 ツツザキヤマジノギク保全地の視察

（1）陣馬形山山頂の自生地見学

陣馬形山は標高1445mで、急な坂や狭い道を連続して登った後にキャンプ場があり、開けた一角の自生管理地では満開のツツザキヤマジノギクが見られた。

お聞きした桂川氏の話によると、自生していたツツザキヤマジノギクも山頂にキャンプ場ができる多くの人が訪れたことで自生地が踏み荒らされて絶滅の危機に瀕したことがあったとのことである。10数年前にキャンプ客が減少した折にツツザキヤマジノギクの生息状況を確認し、僅かに残っていたツツザキヤマジノギクの保全を開始して現在の姿まで回復したようである。近年の保全活動は自生地の復元を主体とした管理を行い、苗の定植は行わずに、こぼれ種による発芽と開花までの状況を見ながら自生地の復元状況を確認している。キャンプ場が近いため、人為的な踏圧によって自生地の範囲が減少せず、また景観を阻害しない程度の礫石などを境界に設置することを優先して保全活動をおこなっているという。

河原に生息するツツザキヤマジノギクが、何故、高い山の山頂で生息しているのか不思議な思いにかられて保全地を訪れた。

見学して感じたことは①名前由来のヤマジノギクを漢字で書くと「山路野菊」であることから、本来は開けた山路に生息していたのではないかと思われた。②山頂の保全地は河原の礫石（玉石）ではなく、花崗岩の細粒が敷き詰められた場所であり、玉石河原と同様に他の草木が侵入しづらい細粒が覆った環境を好んで生育したのではないかとも思えた。



陣馬形山山頂キャンプ場近くの自生地



自生地のロゼットも葉先は筒状

（2）中川東小学校の保全地

天竜川左岸の中腹にある小学校の保全地は、校舎の片隅の日当たりの良い場所にあった。子どもたちが丹精込めて育てた10株程度のツツザキヤマジノギクが満開の花をつけていた。

中川村ツツザキヤマジノギク保全協議会の事業計画によると、前年同様の場所に植栽し、3年生の総合学習として、児童二人で一本の苗を定植して育て、開花時の観察を保全協議会が行うことである。

保全地では茎は1mを超える高さに成長し、花は陣馬形山の保全地で見たものより花弁が白く見えた。ツツザキヤマジノギクの特徴である花弁は、筒状、舌状、変形が見られ、同一株から咲き分かれているものもあった。筒状は離弁花冠、舌状は合弁花冠のように見えて不思議な花だというのが実感できた。

*定植：植物のある場所から他の場所へ植え替える作業をいう。



中川東小学校の保全地

（3）中川中学校の保全地

天竜川を渡った河岸段丘上に建つ中川中学校では、校舎の北側と南側の2ヶ所に保全地がある。校舎北側の耕された花壇の一角に播種して育ったツツザキヤマジノギクが密集していた。日当たりはあまりよくない場所に見えたが、子どもたちの背丈位に成長した先に多くの白い花をつけていた。

説明によると、「発芽後は他の雑草（ツツザキヤマジノギク以外の草）に負けて見えなかつたが、用務員さんが何度も草取りを行ってくれたので多くのツツザキヤマジノギクが成長することができた」とのことだった。興味深い話として、校舎の北側で日当たりの悪い場所では、訪問した10月21日の数日前までは開花していなかつたが、朝夕の冷え込みが増した途端に開花が始まり、日当たりの良い



中川中学校北側の保全地

南側の開花は北側よりも遅くなっているとのことであった。短日性のキク科植物でも、実際の環境においては日長の変化だけでなく、気温や降雨量などに加えて発芽した環境などの様々な要因が絡み合って花を咲かせていることや植物の緻密な仕組みの上に成り立つて開花を迎えていたことが感じられた。花弁の形状は、筒状よりも舌状や筒状と舌状の混在したものが多く、花の色は陣馬形山の日当たりの良い場所よりも全体に白く見えた。校舎南側の保全地は玉石交じりで河原の荒れ地に近かつた。

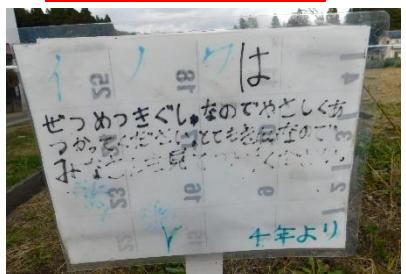
(4) 中川西小学校の保全地

体育館と校庭の横に子供たちの畑があり、石垣の上に囲われた中で小学3年生が総合学習として育てている。西小学校の目標は、周りの畑が広いので自生地の拡大を目指して前年の畝の近傍に苗を定植して、児童二人で一本の苗を育てているという。保全場所の隅に4年生が書いた看板が見られたので、学校全体でツツザキヤマジノギクを見守り育てているを感じることができた。

「ツツザキヤマジノギク保全協議会」の事業計画によると、中川東・西小学校の開花時期に合わせて観察のための授業が計画されている。

2022年10月に中川村でツツザキヤマジノギク研究者の中川さやか氏による「ツツザキヤマジノギクの謎」について講演会が開かれたとのことであった。

中川西小学校の保全地



(5) ツツザキヤマジノギクの苗の一般配布

中川村では環境月間の6月中に保全協議会の会員が育てた苗を村の交流センターなどで配布して定植場所の拡大を目指した活動を行なっている。中川中学校から移動途中の花壇でも配布された苗が定植されてきれいな花を咲かせているのを見ることができた。

他団体への苗の配布や定植場所の拡大、他地域への普及活動として、環境省が推進している※「保護地域以外で生物多様性保全に資する地域」OECM (Other Effective area-based Conservation Measures) の申請のための協議も計画されているとのことであった。

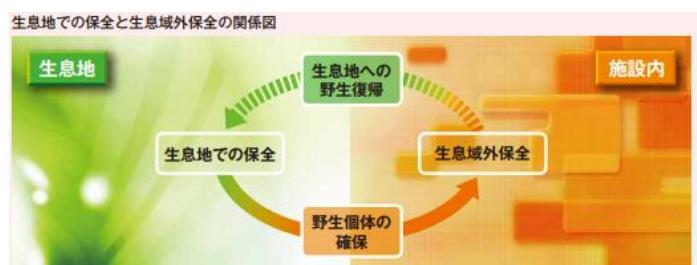
中川村の「ツツザキヤマジノギク保全協議会」は、絶滅危惧種ツツザキヤマジノギク保全のための新たな取り組みを積極的にやられていた。

5 今回の交流会で学んだこと

- (1) 地域住民への積極的な働きかけと協働した保全活動
- (2) 一度絶滅した生息地の復元活動、保護地域以外での取り組み（種や苗の配布など）

6 まとめ

- (1) カワラノギクと類似した生態や形態をもった絶滅危惧種ツツザキヤマジノギク（イナノギク）を保全している天竜川流域の中川村「ツツザキヤマジノギク保全協議会」を訪問して会員から活動について多くの活動事例を聞くことができた。それぞれの環境は異なるが、保全活動をするまでの取り組み内容は参考になるところが多くあった。
- (2) 環境省が推進している「絶滅危惧種の生息域外保全」は、学校・地域住民などを里親とした植栽活動を通じて、絶滅危惧種の保護や地域の環境保護を地域住民の理解と関心を高める住民参加型として取り組んでみたい内容である。
- (3) 溫かく迎えて頂いた桂川氏と交流を続けたい。



出典：環境省 HP “生息域外保全とは”より

* OECMとは、公的な保護地域以外で生物多様性保全に資する地域のこと。